

図1 2007年5月9日15時(日本時間)における光化学オキシダント濃度分布(論文 Fig. 5fより)。地上風向風速は気象庁の気象台・測候所のみ表示。

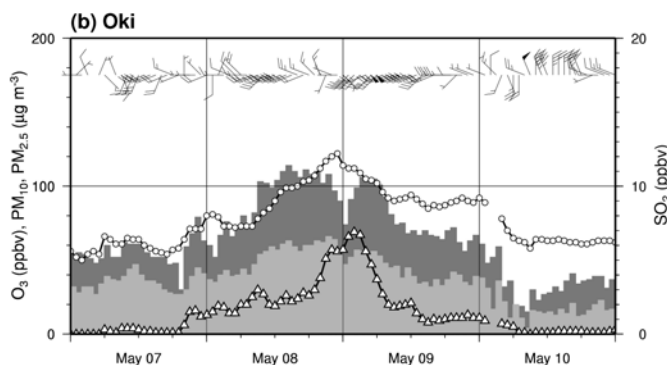


図2 2007年5月7-10日の隠岐におけるO<sub>3</sub>(丸;左軸)、SO<sub>2</sub>(三角;右軸)、PM<sub>10</sub>およびPM<sub>2.5</sub>(それぞれ濃い・薄い棒グラフ;左軸)の1時間間隔時系列。図中上部は西郷気象台における地上風向風速(凡例は図1参照)(論文 Fig. 6bより)。

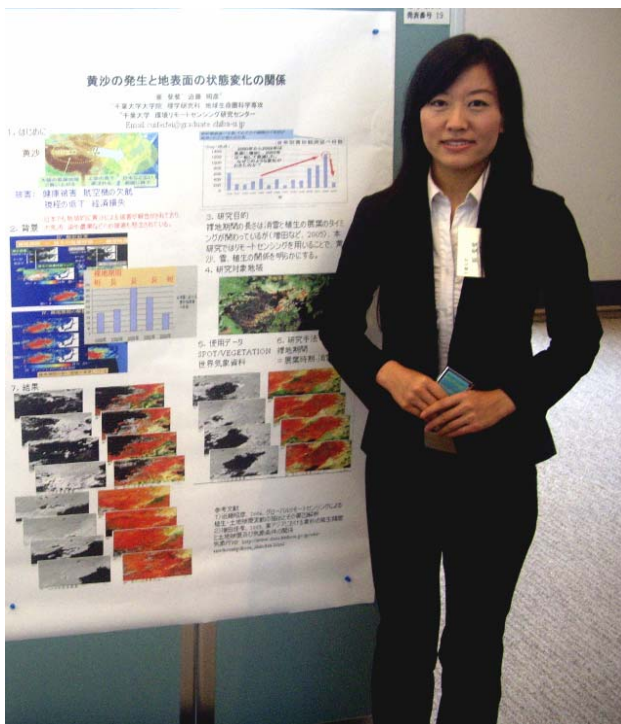
受賞：ベストポスター・プレゼン賞、地理空間情報フォーラム2009・学生フォーラム2009

受賞論文：「黄沙の発生と地表面の状態変化の関係」

受賞者：崔斐斐(理学研究科・地球生命圏科学専攻・地球科学コース・修士課程二年)

CEReSで修士課程の研究を進めている崔斐斐さん(理学研究科・地球生命圏科学専攻・地球科学コース・修士課程二年)の研究発表がベストポスター・プレゼン賞に選ばれました。6月17日にパシフィコ横浜で開催された地理空間情報フォーラム2009・学生フォーラム2009における講演「黄沙の発生と地表面の状態変化の関係」が対象であり、崔さんの出身地である中国、内蒙古自治区における黄沙の発生頻度をSPOT/VEGETATIONデータセットの解析から求めることができる消雪および植生の展葉のタイミングから説明しました。

黄沙の発生頻度は年によって異なりますが、黄沙がよく発生する年は消雪から植生の展葉までの地表面裸地状態の期間が長いことが今回の研究から明らかになりました。また、裸地期間が長い年は温暖で消雪の時期が早く、その後の乾燥のため植生の展葉が遅れるためと考えられます。このことは、地球温暖化が草原生



地理空間情報フォーラム2009、学生フォーラム2009でベストポスター・プレゼン賞を受賞した崔さん。

態系に負のインパクトを与える可能性を示唆しており、黄沙の発生頻度も高くなる可能性があります。今後、気象データ等の解析を加えて仮説を検証し、修士論文を完成させる予定です。

なお、学生フォーラムにおける受賞は2006年の酒井秀孝君（M1）「衛星リモートセンシングによる東シベリアの植生の変動に関する研究」、2007年の白木洋平君（D3）「東京都周辺域における温度分布と都市構造の関係」に続いて三人目となり

ました。今年度の学生フォーラムでは、チンティン ジュエンさん（D1）の「衛星データを用いたアジアモンスーン地域における雨季の洪水による浸水域の評価ーベトナムのフェラグーンを事例研究として」、および大谷克洋君（M1）の「リモートセンシングを用いたバングラデシュ・ガンジス川河口付近における地形変化に関する研究」の発表も行われました。

## 平成 21 年度 CEReS 予算案が決定される

今年度の CEReS 予算は、例年通りに6月半ばに大学本部からの決算分調整後の配分額の示達があり、CEReS 予算委員会が各種委員会などからの必要事項・要望をとりまとめて調整し、予算案を策定しました。この予算案が7月8日に行われた教員会議で承認され、執行に移されています。

今年度の CEReS への運営費交付金配分総額は91,167千円です。図3に、ここ10年間の CEReS 予算総額の推移を示します。2003年度までは校費（旅費・施設整備費等を含む）総額、2004年度の法人化以降は運営費交付金総額を表しています。平成2008年度予算と比較すると、2009年度当初予算額は約1,711千円の減となっています。

図4に、2009年度予算の内訳を示します。金額が最も大きいのは四大学連携の特別経費（研究

推進）で、学内負担5,000千円を含めて41,600千円（45.6%）となっており、ついで、通信費や光熱水料を含む共通維持管理費（13.4%）、非常勤職員経費（12.3%）の順となっています。教員研究費は5,691千円（6.2%）、共同利用研究費は7,600千円（8.3%）です。なお、地球温暖化寄付研究部門（プロジェクト6）の研究経費は運営費交付金とは別枠で扱われており、総額は10,300千円で、配分内訳は寄付部門教員研究費1,508千円（14.6%）、寄付部門シンポジウム経費450千円、共同利用研究費526千円、光熱費相当分1,700千円、CEReS内プロジェクトのプロジェクト6関連研究経費6,116千円（59.4%）となっています。

（CEReS 予算委員会）

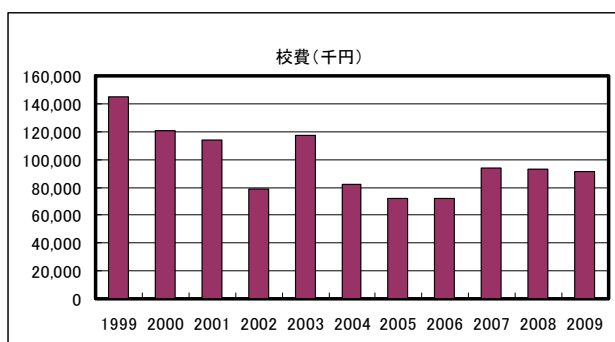


図3 CEReS 校費（運営費交付金）の推移

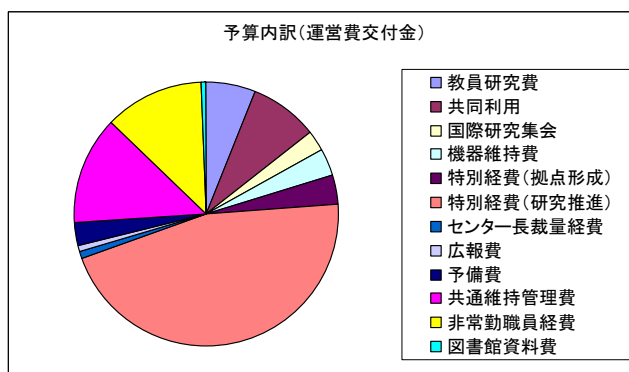


図4 2009年度予算の内訳